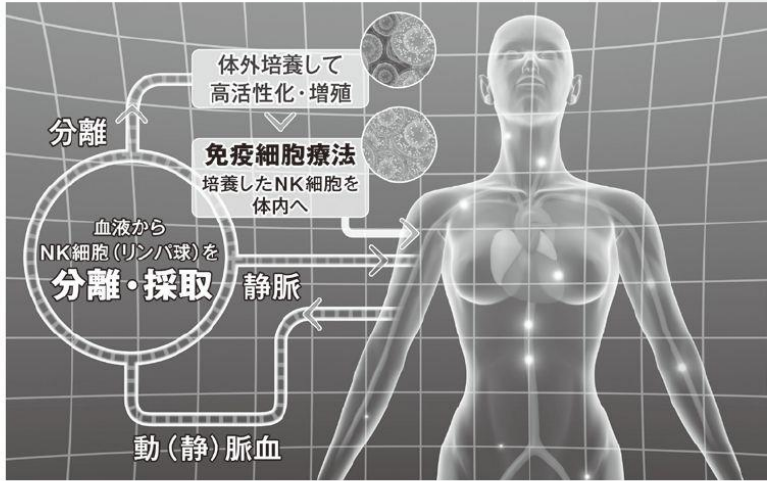


ATLに対する ANK免疫細胞療法の論文が海外誌に掲載される



ANK治療のイメージ



血液5~8ℓを体外循環させNK細胞を含むリンパ球を分離採取する「リンパ球分離採取機」

—逆に培養器に混入したがん細胞が培養によって増えちゃいますよな。

原価以上に承認申請費用の回収が大変で、そこに利益を乗せるとこういう値段になってしまいます。承認申請費用を徹底して抑える工夫をしないと保険適用になっても本人負担分が自由診療より高くなってしまいます。

—長期生存4名様については今回の論文で他に4例の成功例ありとしています。それ以外はどうしても高齢の方が多いため他の疾病等が早くお亡くなりになられたり、症状が進行し過ぎて培養が間に合わなかったり、

—ANK療法は他の種類のがんも治療対象ですが、なぜATLの症例が論文発表されたのですか。

標準治療が確立していないため社会的要請も強く、またANK療法単独の効果であることを示しやすいという点もあります。固形がんと違い血液中にがん細胞がいますので、血液検査だけで随時確定診断ができます。固形がんよりはるかに治療効果を判定するデータをとりやすく明確なエビデンスになりやすいわけです。

—保険適用になる見通しはあるのでしょうか。

未承認医療として自由診療で実施され、固形がんの標準量治療12回の点滴を1クールとしておよそ400万円を超える費用がかかります。ATLの場合は半量点滴が基本で点滴1回当たりの単価はおおよそ半額になります。

—実際に治療された医師と細胞培養を受託された医師お二人、ご協力を頂いた大学の

—どの様な治療効果がみられたのでしょうか。症状の進退を繰り返す「くすぶり型」と診断された患者さんの病状が急変し、急性期に移行されました。腫瘍マーカーが急激に増加し、異常細胞率(リンパ球に占めるATL細胞の比率)が27%に達していました。

ANK療法を受けたら腫瘍マーカーが低下して落ち着き、さまざまな皮膚症状も消え、ATLに伴う高血圧や他の異常値も正常範囲に入ったので退院され、ご自宅で日常生活を送られるようになりました。

—ATLというのは治療が難しいですよね。

日本血液学会のガイドラインによると最近ではアグレッシブATL(特に進行が早いタイプ)の余命中央値が13カ月、進行が遅いタイプも結局は急性転化し、急性転化後の平均余命中央値が1年、急性転化前には治療は行わないコンセンサスがあるとしています。

—研究の方々が症例報告として論文投稿されたものです。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

—ATLというのには治療が難しいですよね。

DOI番号 10.3390/reports1020013

Successful Amplified-Natural-Killer Cell (ANK) Therapy Administered to a Patient with Smoldering Adult T-Cell Leukemia in Acute Crisis

